

官邸崩壊

高嶋哲夫

第三回

第二章 沈黙（承前）

4

1

ライアンは地下の官邸制御室から大ホールに上がってきた。

二階大ホールは静まり返っている。

ホールの中央に集めた人質は百人余り。全員が床に座り込んだり、横になったりしている。その周りを銃を構えた三人の部下が取り囲んでいた。

ライアンは新崎総理を探した。アンダーソン国務長官と中央近くに座っている。

あの女はライアンがリーダーであることをひと目で見抜いた。

自分以外の者たちを解放するように話しに来た。話すことはないかと拒否したが、しつこく言ってくる。通訳を銃で殴り付けると頬が深く切れた。新崎が通訳の治療を求めたが、ライアンは拒否した。

ライアンを睨み付けてきた、あの目は忘れない。憎しみに満ちていた。新崎は通訳の頬をハンカチで押さえ、腕を支えて人質たちの中に戻っていった。

新崎の横に、頬にバンドエイドを貼った通訳を見つけた。新崎は膝を抱えて座っている。

アレンがやって来て、ライアンの腕をつかんだ。

「アメリカサイドはうまくいっているのか。マシューと話がしたい」
「まだだ。ここの通信はすべてカットしてある。あんたは黙って見ていてくれ。そういう約束だろう。あと一時間ですべてが動き出す。その前の準備が重要だ」

「もう、これ以上の血は見たくない」

「それは、彼らに言ってくれ。おとなしく従えばすべてがうまくいく」

ライアンは人質たちに視線を移した。

「従っている者も、あんたらは殺しただろう」

「日本の警護官とDSSの隊員に限っている。DSSの怖さをあんたは知らない。将来起こるトラブルを先に取り除いただけだ」

DSSとは、アメリカ国務省の警護専門部隊のことだ。

アレンと話している間にも、ライアンは部下に指示を出していた。

「あと一時間でこの官邸は我々の思い通りだ。どんな攻撃にでも耐える要塞に変わる」

「そんなことは聞いていない。我々の要求を世界に示して、立ち去

るだけだろう」

「要求は色々あってね。交渉にも時間がかかりそうだ。その前に、
防御を完全なものにしておきたい」

「金を要求するのはあんたらの勝手だが、我々の目的は果たしても
らう」

「分かっている。だから、こうして命を懸けて東洋の島国まで来た。
あんたらも十分に我々を理解し、信じてくれ」

「マシユーと話をさせてくれ。こっちの状況を伝えたい」

「現在、ここの通信をカットしているのは知ってるはずだ。あんた
は黙って俺たちの言うとおりにしてればいい。俺を怒らせないでく
れ。俺は忙しい」

これで話は終わりというふうには、ライアンはアレンの肩を叩くと、
部下の所に行った。

中ホールでスマホの妨害電波の発生装置を組み立てていた二人が
やってきた。

一人は筋肉質で耳が見えるほど短い黒髪の女性だ。

「この衛星電話で室内からでも自由に話せる。安全な電話よ」

女は携帯電話をライアンに渡した。

「遅刻だぞ、マギー。予定より二十分遅れだ」

「それも、予定に入ってるんじゃないの。あんたのことだから」

「そうに違いはないが、予定通りに越したことはない」

「官邸の電話回線の一回線だけはつないだ。この回線が外部の中継

基地とつながっていて、室内でも衛星電話を使うことができる。アメリカと話ができるってこと。盗聴防止機能もついている安全な電話。誰に聞かれることもないよ」

マギーが小声で言う。

ライアンは、時計を見てスマホのボタンを押していった。

日本時間、午後八時。カリフォルニアは午前三時だ。

呼び出し音が鳴るとすぐに男の声が聞こえる。

〈作戦はうまくいっているか〉

「官邸はほぼ制圧しました。地下の官邸制御室のコンピュータを調整しています。しかし——」

〈プリンセスは確保したのか〉

「官邸内にいることは確かです。現在、全力を——」

〈あと三十分でピエロに電話をする。それまでに、プリンセスの拘束は可能か〉

「制御室のコンピュータが使えるようになれば、防犯カメラの作動ですぐに発見できます」

〈急げ。時間がないぞ〉

電話は切れた。

ライアンはマギーと二人で地下に降りていった。

地下の官邸制御室には、正面に二台の大型モニターがあり、右のモニターは縦に四、横に五、計二十に分割された画面が並んでいる。

それぞれに、官邸各所に設置されている数十台の防犯カメラ映像を

一定の時間間隔で映し出ししていた。

この部屋で、官邸制御機能を使えば、官邸内の侵入者を阻む防火扉はばを兼ねた防護扉の開閉を行い、防犯カメラで侵入者の動向を調べることができる。

ライアンは正面のモニター群に目を移した。プリンセスの顔を思い浮かべた。青く美しいが挑戦的な目、意志の強そうな薄い唇。一見華やかそうだが、その裏には暗い空気のようなところどころのないモノを抱えている。不思議な女性だった。

部下に防犯カメラの映像を巻き戻すように指示した。

「女を見つけるんだ。見つけ次第、俺のところに連れてこい」

ライアンはポケットから二枚の写真を出した。一枚は、正面を向いた生真面目な顔だ。何かの証明書に使われていたものか。もう一枚は白いブラウス姿だ。肩までのブロンドの美しい女性だ。カメラに向かって笑いかけている。部下には新崎総理、アンダーソン国務長官の写真とともにスマホに送ってある。

「人質の中にまぎれ込んでいるということはないの。私ならそうする」

「調べたがいなかった」

「女なんて化粧一つでどうにでも変わるものよ」

「確かめるか。大ホールとエントランスホールの人質をもう一度調べろ。逆らえば容赦するな。ただ女だけは生かしておけ」

「その女にとっても、官邸は初めての場所なんですよ。自分が追わ

れてるなんて思っていないし。人質の中にいたほうが安全よ」

「急いで見つけるんだ。交渉はあと一時間で始まる。それまでには何としても拘束するんだ」

強い口調で言い切った。マギーが肩をすくめている。

高見沢の表情が変わっている。目を閉じて眠っているようにも見え、顔色はさらに悪くなっている。今までは、痛みをこらえていたのだ。腹の血は止まっているが、今後どうなるか分からない。

スーザンはイヤホンを右手で押さえて聞き入っている。

「何だか、騒がしい。マイクを置いてきたのは中ホールの前の植木鉢でしょ。靴音も激しくなってる。出入りが多くなってるのよ」

「あの場所は、広範囲の音が拾えると思った。でも本当は、あそこまでいくのがギリギリだったの。怪しまれると終わりだから」

「あなた、さすがにプロの警護官ね。私には絶対に無理」

「ちよっと訓練を受ければ、誰でもできる」

高見沢が目を開けて上体を起こし、自分のイヤホンを耳に挿した。

「やはり何かが起こってる。攻撃——人質——警察——そんな言葉が飛び交っている」

「なにか動きがあるんでしょうか」

明日香は高見沢に聞いた。

聞いてから、後悔した。動きがなければおかしな時間だ。

高見沢は顔をしかめながら明日香のほうを向いた。傷がかなり痛

むのだろう。モルヒネも必要な量の半分しか打っていない。弾はまだ腹の中だ。今でも顔をしかめるほどに痛むようだ。近いうちに痛みはさらにひどくなるだろう。

「女と何を話していた」

さらに身体を起こしながら言った。明日香は慌てて、その身体を支えた。

「テロリストたちが慌ただしいです。中ホールへの出入りが厳しいことと、エントランスホールに人が集中しています」

「窓から外を見てみる」

窓からは正門前の道路が見え、数十台の警察車輛が並んでいる。その周りにはかなりの人数の警察官が待機していた。

「彼らは突入するつもりでしょうか」

「S A Tの奴らなら考えそうなことだ。出番がないので、焦ってることは確かだ」

S A Tの正式出動があったのは、二十年以上前だ。

一九九五年、「函館ハイジャック事件」に、特殊部隊S A Tが初めて表舞台に出た。

新興宗教の信者を名乗る中年男が、羽田発函館行きの日空機をハイジャックした。函館空港に到着すると、犯人は乗客を乗せたまま機内に立て籠もった。S A T部隊は北海道警の機動隊とともに機内へ強行突入し、犯人を逮捕した。

これを機に警察庁は、非公式にしていた特殊部隊S A Tを公表し

た。

「彼らの存在を世に出すには最高の舞台だ。うまくやれば一気に世間に認められる」

「でも、いま突入したら、多くの人が死ぬことになります。テロリストたちは容赦なく人質を殺します。警護官たちを見ましたよね。

失敗すれば、総理と国務長官は——」

「間違いなく殺される」

明日香が言いよんだ言葉を高見沢は続けて言い、立ち上がろうとしたが呻き声^{うめ}を上げて座り込んだ。

「また出血します。面倒をかけないでください」

明日香の言葉で高見沢は壁にもたれて目を閉じた。

警視庁の対策本部は緊張感が張り詰めていた。

梶元副総理は、SATの隊長有馬と警視総監の高山とともに、対策本部にいた。

官邸前に待機している警護部隊から、現場指揮官の横田警護課長が呼ばれて現状を説明し、その後有馬からSAT突入の説明を受けていた。

梶元はテーブルに広げられた図面に見入っている。

「議員会館から国会に通じる地下道とは違うのですね」

「まったく別物です。あれは誰でも利用できます」

衆議院議員会館の地下一階の通路の突き当りには、ガラスの扉があり、脇に警備員が立っている。国会議事堂につながる地下通路だ。扉から先の通路にだけ、オレンジ色のカーペットが敷かれている。通路の幅は二メートルほどで、天井は低い。

このまっすぐな道を五分ほど歩くと、国会議事堂の裏側に到着する。

「S A Tが突入に使うのは国会から官邸に続く地下道です。戦時中に作られたもので、この地下道を知る者は多くはいません」

「官邸に出入りするようになって四十年がたちますが、こんな地下道があると聞いたのは初めてです」

「官邸警備部の申し渡し事項です」

「総理は知っていますのですか」

「私がお話ししました。万が一のときのためです。第二次世界大戦末期に、首相の安全を考えて掘られたもので、終戦の数ヶ月前からは、ほとんどその地下道で国会との間を移動していたということですよ」

高山が梶元に言う。

「建て替えのときはどうしたのですか。旧官邸とは場所が違います」

「新しい官邸に移されました。少しの工事ですなぐことができたと聞いています。同じ敷地内ですから」

「なぜ、そんなモノを今まで残しておいたのです。マスコミに漏れ

ると、また騒がれる」

「もしもの時のためです。六十年の日米安保改定の折りも、国会をデモ隊に取り囲まれた時に、総理は地下道を使って国会から退去するつもりでした。しかし、何とか使わずに済みました」

デモ隊と機動隊との衝突で一人の女子大生が亡くなり、デモ隊は国会敷地内に乱入した。

「まだ使えるのですか。戦後七十年以上がすぎています」

「数年に一度、整備が行われていると聞いています。その地下道を利用すれば、テロリストに気づかれることなく、官邸に侵入できます」

「テロリストも知っていて、待ち構えていることはないでしょうね」

「地下道の存在は、機密中の機密です」

高山は自信を持って言い切った。

「現場の警察官の意見も聞いておきたいです」

梶元は横田に視線を向けた。

「私は意見を言う立場ではありません。現状をお話するために呼ばれました」

「あなたたち現場の意見こそ重要です。実際に危険な目に合うのはあなたたちです」

横田は視線を外して考えていたが、やがてしゃべり始めた。

「もう少し待った方が賢明かと思われます。我々はテロリストの正体、人数、武器の種類、装備も何一つ把握しておりません。彼らの

目的すらもです。こういう相手に攻撃を仕掛けると、予測不能の事態が起こる可能性があります」

「だから早い方がいいのではないか。敵もそんなに早く突入してくるとは思ってもいない。敵の準備ができる前に突入すべきだ」

横田に向かって高山が言う。面倒なことを言うなどという顔をしている。

高山が何度目か時計を見た。警視総監室で三十分あまり、対策本部でさらに三十分以上すぎている。

「現在、警視庁のSATチーム二十三名がすでに準備を終えて官邸前の警備車に待機しています。許可が出れば地下道を通って官邸に突入し、十分で制圧できます」

「人質に多くの犠牲者が出ます。その中に総理と国務長官が含まれていれば、私はどうなりますか」

梶元の言葉に、高山と有馬が顔を見合わせている。

「総理代理の『代理』が消えるだけです。悪いのはテロリストたちです」

長森が梶元の耳元で囁いた。

高山がわざとらしく時計をもう一度見た。再度、決断を迫ってすでに十分がすぎている。

「テロリストは官邸内で何らかの準備を進めていると思われま

す。決断は早い方がいい。彼らの態勢が整わないうちに」

高山の言葉に、梶元は長森に視線を向けた。こういう決断を下す

のは初めてだった。自分の決断ひとつで死傷者が出るのだ。それも複数だ。

長森がかすかに頷いた。

「細心の注意を払ってください。総理にもしものことがあれば、私の責任になる」

「では、作戦遂行の指示を出します」

高山は有馬を伴い出ていった。横田は二人のあとを追うように、現場に戻っていく。

梶元は秘書と二人、総監室の隣の会議室に移った。

「本当にこれでよかったのだろうか。総理にもしものことがあれば、総理だけでなく、他の人質の一人でも死んだりすれば、その責任は私にかかってくる」

「心配ありません。そのときは、先走りすぎた警視庁の責任です。副総理は大局を眺めていればいいんです。成功すれば重大な決断をした副総理。失敗すれば警視庁の暴走です」

長森が言い放った。

廊下が騒がしくなった。SATの官邸突入の命令が正式に伝えられたのだ。その準備に追われているのだろう。

梶元は高山に案内され、警視庁地下の指令室に行った。

部屋には二十名近くの職員が働いている。室内は静まり返り、職員
の息遣いまで聞こえてきそうだった。

梶元は奥の二つ並んだ大型モニターの前に案内された。

モニターの前では、S A T隊長の有馬が部下と画面に見入っている。
る。

画面には薄暗い穴の中に黒いユニフォーム姿で、ライトと暗視装置
付きのヘルメットをかぶった一団が映っていた。全員が短機関銃
と拳銃で武装している。

「国会の地下道前です。これからS A T二十三名が官邸に通じる地
下道に入ります」

高山が梶元の耳元で囁くように言う。

「S A Tの隊員は各自ヘルメットの前に小型カメラを付けています。
彼ら一人ひとりの行動がここからリアルタイムで分かります」

高山の言葉通り、左のモニターは小さく分割され、二十三個の映
像が映っている。各隊員がヘルメットに付けている小型カメラの映
像が映されているのだ。各々が短機関銃を構え、先頭の数人は弾除
けの強化プラスチックの盾を持っている。

背後で息を呑む気配がした。いつのまにか半数以上の職員が梶元
の背後に集まっている。

「作戦開始。全員、ライトを消して暗視装置を使え。注意してかか
れ」

有馬がモニター画面に目を向けたまま指示を出した。

モニター画面からライトの光が消え、赤外線映像に切り替わった。S A T 隊員が前進を始めた。縦横二メートル四方の狭い地下道を一列になって進んでいく。

先頭に行く隊員の赤外線映像が、もう一つ中央のモニター画面に映されている。

「攻撃されたらおしまいだな」

梶元の口から無意識のうちに漏れた。

「テロリストはこんな地下道があることさえ知らないでしょう」

「もし、知っていて、待ち伏せていたら」

「全滅です」

一瞬の間をおいて有馬が答える。

「このモニター画面が動かなくなった場合は死んだか、動けなくなつたか、それとも持ち主を失ったヘルメットが転がっているかです」

カメラ映像の先に、頑丈そうな鉄のドアが現れた。表面には一部サビが浮いている。

「行き止まりか」

「ドアは地下道内部に二ヶ所あります。それを通り抜ければ官邸に行き着けます。両方のカギを我々は持っています」

高山の声を聞きながら、梶元の脳裏を不吉な影がよぎった。

官邸地下の制御室では、ライアンと数名の部下がパソコンを取り囲んでいた。画面には赤っぽい赤外線カメラの映像が映っている。

「地下道内の映像よ。二ヶ所にカメラと爆薬を仕掛ける。外部から気付かれずに侵入するには、ここしかない。寒いでも良かったんだけど、せつかくあるものでしょ。有効に使ったほうがいい」

マギーが画面とライアンを交互に見ながら言う。

画面に短機関銃を構え、ヘルメットに暗視装置を付けた男たちが現れた。先頭の男の両脇には透明な盾を構えた男がついている。背後には同様に完全武装した男たちが続いていた。

「A地点に接近。前方十メートルの天井に爆薬を仕掛ける」

マギーの指が爆破装置のスイッチにかかった。

「まだだ、彼らの頭上で爆発させる」

ライアンの声が静まり返った室内に、不気味に響いた。

「あとはまかせた。俺には他にやることがある」

ライアンはマギーの肩を軽く叩いて立ち上がると部屋を出た。

明日香、高見沢、スーザンの三人はテロリストから奪った無線機を囲んで座っていた。雑音混じりの早口の英語だが、慣れると単語は何とか聞き取れるようになっていた。

「地下だ。敵は地下道から突入してくる。バカな奴らだ」

スーザンが鮮明な発音で繰り返した。

「地下道って、そんなものあるんですか」

「国会と官邸との地下道だろう。聞いたことはあるが、誰も信じてはいなかった。上層部は知っていたのかもしれない」

明日香の問いに高見沢が答える。

「準備はできているのか。人をやれ。結果を知らせるんだ。……彼ら何のことを言ってるの」

テロリストが中ホールで指示を出しているのだ。

飛鳥はスーザンに地下道について手短に話した。

「テロリストは地下道のことを知ってて、何かやろうとしている」

「S A Tか自衛隊の特殊部隊が、テロリストに攻撃を仕掛ける。状況からすれば、おそらくS A Tだ。テロリストは地下道のことを知っている。罠を仕掛けて待っているのかもしれない」

「でも、本当に突入するつもりでしょうか。政府はまず交渉を試みるでしょう。官邸突入なんて信じられません」

「俺だってそうだが、総理も殺されていると思っっているのかもしれない。総理の代理は——副総理、梶元か」

「だったら、総理が生きていることを何とか知らせなきゃ」

〈地下道は、五人もいればいい。あとはマギーの指示に従え〉

無線機から、指示を出す男の声が聞こえる。はっきりした自信に溢れた声だ。

「待ち構えていることを外に知らせなければ。どうすればいい」

高見沢が動こうとして、顔をゆがめた。傷が痛むのだ。

「警部補はモールズ信号を知ってるって自慢してましたね」

「自慢なんてしてない」

「窓からライトで合図を送ることはできます。彼らもこっちを注視

しているはずですから。必ず気づきます」

「懐中電灯がいる。この部屋にはないか」

「私が捜してきます。スーザン、あなたは警部補を見て」

「どこを探す」

「会議室には非常用の懐中電灯が備えられているはず」

明日香は部屋を出た。慎重に防犯カメラの死角を思い出しながら進んだ。

五分後には明日香は懐中電灯を持って部屋に戻った。

「俺を立ててくれ。モールス信号を知っているのは俺だけだ」

明日香とスーザンは二人で、高見沢の身体を窓際に持ってきた椅子に座らせた。

高見沢はブラインドの隙間から懐中電灯を出して、外に向かって点滅させ始めた。

「突入は中止せよ。テロリストが待ち構えている。地下道からの突入を中止せよ」

道路に待機している警察官で、この光に気づく者はいらぬのか。モールス信号を読むことのできる警察官はいらぬのか。

明日香は拳銃を持って立ち上がった。

「私は地下道に行きます」

「どこにあるか分かるのか」

「地下階でしょ。行けば分かります。テロリストが集まっていると

「……」

高見沢は答えず点滅を続けている。反対はしていないということだ。

「持っていけ。お前の方が必要だ」

明日香が振り向くと、高見沢が短機関銃に視線を向けている。

明日香は短機関銃を構えたまま、階段を使って地下に降りて行った。横を迷彩服の男たちが駆け抜けていく。

廊下の一角に人の気配がする。少なくとも五人はいる。いや、もっと多いか。だがこれでは少なすぎる。

そのとき、低い音が全身がしびれる音が響いてくる。音というより、重い地響きだ。

「遅かったか」

明日香の口から低い声が漏れた。地下で爆発が起こった。

明日香は高見沢とスーザンのいる四階の部屋に戻った。

「遅かったか。爆発音が聞こえた。かなり大きな爆発だったようだ」

高見沢が言う。

「爆弾はどこか別の所でスイッチを押したか、感知式の物だったようです。テロリストたちはドアの外にいました」

「突入部隊がドジをやったか。バカな奴らだ。無駄死にだ」

「そんな言い方は止めてください。彼らは私たちを救出するために

――」

「バカだからバカと言った。おまえもドジをすればああなる。俺もドジをやった。だからこうなった。自業自得だ」

明日香は開きかけた口を閉じた。この人には何を言っても素直に聞いてもらえない。

「私はこれからどうすれば——」

「おまえなら、どうする。言ってみろ」

「やはり、外部との連絡を取ります」

「それにはどうすればいい」

明日香はどう答えたらいいか分からない。

「テロリストたちが大騒ぎしてる。敵をやっつけたって」

スーザンが英語でしゃべり始めた。イヤホンで聞いている声の復唱だ。

「バカな野郎たちだ。もう、しばらくは何もやらないだろう。この間に通信を確保しろ。屋上と地下に人員を増やせ。人質が騒ぐようなことがあれば、容赦はするな。プリンセスを見つけれ。あと三十分だ——」

「プリンセスって何のこと」

「彼らがそう言ってるだけ。私は知らない」

「通信を確保しろとはどういうことだ。彼らはまだ、政府と取引をしていないのか」

「官邸内では携帯電話も固定電話も使えません。通信が可能なのは、テロリストたちの無線だけです」

明日香の心を絶望的な気分が襲った。官邸の地下道で仲間の警察官が死んだ。それに対して、自分は何もできなかった。

警視庁、地下の指令室の空気は凍り付いていた。

先頭画像を映していたモニター画面はブルーに変わり、何も映っていない。先頭に行くS A Tのカメラが壊れたのか。分割モニターの半分がブルーに変わり、残り半分は黒くなっている。動いているものはない。かすかな雑音のみが聞こえている。

ドンという地響きにも似た音と共にすべて画面が激しく揺れ、こなくなったのだ。

「カメラの大半が故障している。生きているカメラは——埋まっているんだ。爆発で地下道が崩れ、土砂に埋まった」

我に返ったように有馬が叫んだ。

「何が起こったのですか」

梶元のしわがれた声が部屋に響いた。

「地下道で爆発が起こった模様です」

高山のうわずった声が聞こえる。

「彼らは——S A Tの隊員二十三名はどうなったのですか」

「爆発で埋まった。全滅したようです」

「確認したのですか」

「まだですが——この画面は——」

「我々は今後、どうすれば——」

梶元は言葉が出ない。何と言っているかわからない。

「テロリストが爆薬を仕掛けていたと思われます。そのため突入部隊は——」

有馬もあとの言葉が続かない。

「ただちに救助隊を送ってください。生存者を救出してください。ただし、細心の注意を払うように。これ以上の死傷者には耐えられない」

我に返ったように梶元が言う。

梶元の言葉を聞いて、有馬の部下が慌てて部屋を出て行く。

ドーンという腹に響く鈍い音とともに振動が伝わってくる。地下での爆発だ。この重厚な建物に振動を与える爆発はかなり大きなものに違いない。

人質たちの中で複数の悲鳴が上がった。恐怖のためか泣き声も聞こえてくる。

「何をしたんだ」

アレンがライアンの所に飛んできて、押し殺した声で言う。その声は上ずり、顔は青ざめて震えていた。

「ちょっとした爆発だ。地下道が埋まった。気づかれずに官邸に入る唯一の手段だと聞いていた。だから我々がその方法をつぶした。もう官邸に入るには正面か屋上しかない。だが屋上には地対空ミサイルを設置している。ヘリは簡単に標的になる」

アレンがライアンの襟首をつかんだが、ライアンは片手でそれを外した。

「また人が死んだのか」

「見たわけではないが、たぶんそうだろう」

「あんたらがやったことか」

「仕掛けてきたのは奴らだ。引つかかったのも奴らだがな。間抜け者の末路だ。おまえらも、せいぜい気をつけるんだ。ここは危険でいっぱいまっろの場所、戦場だ」

ライアンは不気味な笑みを浮かべた。

「アメリカと話をさせてくれ。どうなっているか知りたい」

「焦るな。すべてうまくいってる。おまえらは黙って見てるだけいい。これ以上、口を出すと、おまえらの居場所もあっちになる」

ライアンは人質たちの方に視線を向けた。

「それとも、あっちがいいか」

視線の先には警護官の遺体が無造作に積み重ねられている。

部下がやってきた。

「プリンセスは人質の中に見当たりません」

ライアンの耳元で言う。

「官邸内にいることは間違いありません。誰も外には出していません」

「記者として、國務長官に同行しているはずだ。國務長官を連れて

いこ」

ライアンは部下に指示した。

7

遠山は無意識のうちに立ち上がった。とおやま

腹に響く不気味な音だ。地下での爆発に違いなかった。

部屋中にざわめきが満ちて、多数の者が出入り口に押しかけた。

「なにが起こったんだ。爆発音だぞ」

「警察発表はどうなってるんだ。ここで公式発表すると言うから、俺たちは国会記者会館から引いたんだ。それが、なしのつぶてじゃないか」

入り口付近で若い制服警察官と言い合っている記者の声が聞こえる。

「よせ。ここの警官をイジメても仕方ないだろ。彼だって、官邸で何が起きているか知らないんだ」

「発表はここで行うんじゃないのか。もう一時間も待たせたままだ」
背後から怒鳴り声が聞こえる。

遠山は腰を下ろして深く息をついた。

遠山信一郎しんいちろうは政府が指定した、東京エアホテルに設置された臨時のプレスセンターにいた。

確かに国会記者会館では近すぎる。通りを挟んで正面が官邸で、隣が現場の対策本部が置かれている内閣府だ。警察もマスコミの目

の前では、何かとやりにくいのだろう。

東京政経新聞の政治部記者となって二十年になるが、東京での本格的なテロは初めてだった。しかも、官邸が占拠されるとは。

携帯電話が鳴り始めた。同僚の速水記者からだ。彼女は現在、有楽町ちようの本社ビルに詰めている。本社では全記者に動員がかけられ、大騒ぎのはずだ。

「いま、送った。時間と情報不足で十分じゃないけど。なんせ、官邸ちように開くわけにいかないんだから」

「仕方がないさ。新しい情報は随時送ってくれ」
「分かってる。当分、徹夜が続きそうね」

電話は切れていた。

遠山は席に戻りパソコンを立ち上げた。

頼んでいた資料が入っている。占拠当日の新崎総理の行動。官邸晩餐会のメンバーだ。

テロ集団は官邸で開かれた晩餐会を狙って襲撃した。十分ほど激しい銃撃戦が繰り広げられ、後は散発的な銃声が聞こえてきた。

警護官が射殺されたと、官邸からかろうじて脱出してきた官邸警備員が言っていたという情報がある。その後はいつさい、政府は沈黙を守っている。

遠山が入手している情報はそれだけだ。だがそれすらも、確かな裏付けは取れていない。推測の域を出ていないと言うことだ。

現在、官邸は東門と西門は閉じられ、門の外には警官が立ってい

る。

遠山は送られてきた晩餐会出席者の名簿に目を通した。

晩餐会は小規模で、出席したのは三十人余りか。警護官は日本側が二十人弱。アメリカが五人だ。警護官が撃たれたという情報があるが、死傷者は何人だ。

その他、残っていた職員を加えると、人質は百人近くになるのではないか。

遠山は名簿の名前を目で追っていった。

警護官の中に女性が一人いる。新崎総理に付いている女性警護官だ。

「夏目明日香、二十七歳、が彼女か」

呟くような声を出した。

新崎総理の行く先々で、常に寄り添うように立っていた、スレンダーな女性を思い浮かべた。彼女も殺害されたのか。

遠山の全身に重く暗い影が広がっていく。

第三章 要求

1

アンダーソン 国務長官が大ホールから連れて来られた。迷彩服の男に腕をつかまれ、背には短機関銃を突きつけられている。

背筋を伸ばして毅然きぜんとした態度を保とうとしているが、額ひたいは汗で光っていた。

「私はリーダーのライアンだ。我々の指示に従えば、危害は加えない。きみの随行員にもね」

「きみらは正気か。すでに警護官は殺されている」

ライアンは薄い笑いを浮かべた。

「たしかにそうだな。今の言葉は撤回てっかいする。我々は慎重なんだ。最初に脅威を取り払っただけだ」

「人質を取るなら私と日本の総理で十分だろう。他の者は解放してくれ。その方がきみらも楽だろう。日米両政府とも交渉がしやすい。

交渉は——」

ライアンが突然、国務長官の頬を殴った。笑みは消え、目には冷酷さが宿っている。

「私に意見をするな。ただ聞かれたことに答えればいい。アメリカ

から同行してきた者で、今夜のパーティに招待されたのは、大ホールにいる者がすべてなのか」

「それはきみたちの方が詳しいだろう。私が把握はあくしているのは、アメリカ政府の関係者だけだ」

「確認しているのか」

「きみらが殺害した警護官以外は。それより、何が望みだ。テロに対してアメリカ政府は——」

再びライアンが国務長官を殴った。国務長官が拳を握りしめると、迷彩服の男が腕をつかんだ。

ライアンは部下に、大ホールに戻すよう指示した。

「どこかに潜んでいる。一人も官邸から出すな。地下の警備室に防犯カメラの監視を徹底するように伝えろ」

ライアンは苛立いらだちの混じった口調で怒鳴るように言った。

明日香は二階のホール近くや廊下で聞いた、テロリストたちの話をまとめようとしていた。

彼らは数十名、少なくとも三十名以上はいる。組織化された集団だ。しかし、完璧にまとまっているかといえば、そうともいえないようだ。

完全武装して迷彩服を着ている者たちの動きも様々だった。最初に警護官たちを射殺していった男たちは完全なプロ集団だ。何の迷いもなく、射撃の腕も正確だった。明日香が襲って迷彩服を奪った

テロリストは、高度な訓練を受けているとは思えなかった。明日香の策略に簡単に引つかかって、銃口を下げて近寄ってきたので、一撃で気絶させ、迷彩服を奪うことができた。あまりに個々の能力が違いすぎる集団だ。

さらに彼らの中には日本人もいるし、ブレザーやジャンパー姿の者も数人いた。どこかおかしい。

「彼らは混成部隊ではないでしょうか。全く異なる組織の者たちの集まり」

高見沢が閉じていた目を開け、視線を明日香に向ける。

「軍事訓練を受けた者たちと、全く違った職種の者たちです」

「中ホールにいるのは精鋭部隊だ。簡単に警護官を倒した。エントランスホールの奴らは、数人以外は、寄せ集めた部隊だ。欧米人、日本人、アラブ人、国籍は多岐^{たき}にわたる」

「何とかその事実を外部に知らせなければ」

しかし明日香には連絡方法が思いつかない。今頃警視庁では懸命の情報収集をやっているだろう。

「みんな死んでしまった。あの爆発じゃ誰も助からない」

明日香が消えるような声を出した。じっとしていると地下での爆発音と振動がよみがえってくる。あれでは生き残った者はいないかもしれない。

高見沢は無言で目を閉じている。SATの中には彼が知っている者も多数いるはずだ。

「あなた、なぜ警護官になったの。いざという時には首相を護るために銃の前にも立つんでしょ。他人のために命を懸けるなんて、私にはできない」

無言で考え込んでいる明日香にスーザンが話しかけてくる。

「大した意味はないのよ」

「話して」

「私の家はね、父は売れない画家。夢ばかり追い求めて、ある日突然中学の美術教師を辞めて、絵を描いてる。今までに売れた絵は二枚。親戚が買ったのよ。お婆ちゃんのお葬式で酔っ払った時にね。」

弟は引きこもり。中学生のときイジメにあつて、高校は通信制。大学は半年で中退して以来、ずっと部屋に引きこもって何かやってる」

「何かって」

「分からない。コンピュータの前に座って動かない。ゲームソフトみたいなのを作って、小遣いを稼いでいるらしいけど。得体のえたいしれない人間。うちの男たちは全くあてにならない。だから、母が働いて家計を支えてる。証券会社のファイナンシャルプランナー。私は母の姿を見て育ったの」

明日香はかすかに息を吐いた。

「私はキツチリしたかたぎの仕事に就きたかった。公務員ね。中でもいちばん形の見える職業は警察官だと思った」

明日香は考えながら英語でしゃべった。初めて本当の理由を話した。よく聞かれることだが、いつもは有名人の横にいてテレビに映

りたかったと言っている。

高見沢は壁にもたれて目を閉じている。聞いているようにも、眠っているようにも見えた。

「私のママは私を十七歳のときに生んだのよ」

明日香の話を聞いていたスーザンが口を開いた。

「やっぱり、アメリカはスゴイ。高校二年生か三年生よ」

「パパはいなかったけどね。高校卒業と同時に私を連れて家を出て、必死で育ててくれた。私も死ぬほど勉強した。大学は奨学金とアルバイトで卒業した。そんなにアルバイトしちゃ、四年で卒業できないと言われたけど、したわ。そして、ジャーナリズムと社会学の学位も取った。男なんて関係ないと思うのはあなたと同じ」

意外な思いで明日香は聞いていた。スーザンの見かけと最初の言動から、金持ちの気ままな娘かと思っていたのだ。

明日香は高見沢を見たが、目を閉じたまままだ。

明日香はそつと窓の外を覗いた。

時折り通りすぎる光が気になっていたのだ。

「ライトは警視庁の指揮車の上からか。あれって、信号なのかな」

「違う。ただ、ライトを当てているだけだ」

寝ていると思っていた高見沢が目を開けている。

「テロリストを威嚇いかくしてるつもりなんだが、効果はゼロだ。今はテロリストが何か言ってくるのを待っているのだろう。俺の身体を起

こしてくれ」

明日香はスーザンと二人で、高見沢の身体を窓際にもたれさせた。

高見沢は懐中電灯を外に向かって数回点灯させたあと、膝に置いて首を垂れている。かなり苦しそうだ。

「まったく気づいていない。一人でも、この光に気づいてくれればいいんだが。だがやりすぎると内部の奴らに気づかれる。官邸周辺も見張っているはずだ」

高見沢の言葉で、スーザンがカバンからペン状のものを取り出した。

「レーザーポインターよ。懐中電灯の光より目立たない」

「光が小さくて弱すぎる。誰も気づかない」

スーザンはポインターの目盛りを回した。赤い光のラインとともに、壁に大きく強い点が光っている。

「光が強すぎる。ラインは消すことができるか」

「レーザー出力は調整できる。いったったか、航空機に当たって問題になったでしょ。あれよ。市販はされていない。たぶん違法よ。

中国に取材に行ったときに露天商から買った」

ダイヤルを回すと、光のラインが小さくなった。壁の輝点きてんははっきり見える。

「違法なんですよ。買わなければいい」

「相手は十歳にも満たない女の子。しつこく売り込んでくる大人の露天商の後ろに立ってるのよ。泣きそうな顔でね」

「買っててよかったってことだ。貸してくれ」

高見沢がレーザーポインターを受け取った。

ライアンは考え込んでいた。

国務長官はプリンセスについては知らないようだ。官邸に入ったのは確かだが、どこかに消えてしまった。

マギーが衛星電話を持ってきた。

ライアンは時計を見てから衛星電話のボタンを押して耳に当てた。感度は良好だ。

「日本サイドは順調です。官邸は制圧しました。プリンセスはすぐに見つけます」

「時間がない。プリンセスが官邸内にいることは間違いないんだな」

「入ったことは確認しています。人質の中にはいません。どこかに潜んでいます。発見して拘束コウソクするのは時間の問題です」

「おまえの責任で必ず見つけ出せ。小さなミスが膨れ上がることもある。東洋の教えにあるように、千丈の堤も蟻の一穴から、だ」

どんなに堅固な堤も、アリが開けた小さな穴から崩壊するということとえだ。

「分かっています。早急に解決します」

電話を切るとライアンは部下を呼びつけた。

「三十分以内にプリンセスを見つける。五階と地下の両方からローラー作戦を始める。ひと部屋ずつ、徹底的に調べるんだ。総理執務

室は特に念入りにやれ」

ライアンの焦りを含んだ声が響いた。しかし、と一つの疑問がライアンの心に浮かんだ。アメリカサイドで大統領に直接電話を掛けることのできる人物とは誰なのだ。

明日香たちは無線機とイヤホンから聞こえてくる声を聞いていた。ライアンという男が指示を出している。彼がテロリストのリーダーなのだろう。

スーザンが明日香に向かって泣きそうな顔を向けた。

「五階と地下の両方からひと部屋ずつ調べると言ってる。私たち、絶対につかまって殺される」

「大丈夫。今まで逃げる事ができた。これからも、逃げ続ける。そして時を見て反撃に出る。テロリストには負けない」

「プリンセスって何なの。お姫様でしょ。彼らが探してる。日本のお姫様がここにいるというの」

「名前じゃないのか。しかし、今日の招待客にそんな名は聞いたことがない。おかしな名だから、あれば覚えている。おまえは記憶しているか」

高見沢が明日香の方を見た。明日香は記憶を探ったが、招待客の中にはいない。

「彼らの符丁ふちようじゃないですか。我々が総理をクイーンと呼ぶように」

「そうかもしれんな。だが、アンダーソン国務長官の夫人は今回の外遊には同行していない。アメリカ側には大使夫人と通訳、国務省の官僚が二人で、女性は四人だ。その他にはマスコミ関係が十人。うち三人が女性。あんたもその一人だ」

高見沢がスーザンに視線を向ける。

「私は関係ない。テロリストに符丁まで付けられて狙われる大物じゃないし、覚えもない」

「官邸に居るのは日本在住のジャーナリストが一人に、後の一人は、フリーのジャーナリストです」

「彼女たちは人質の中にいた。アメリカ大使はどうだ。夫人も同伴している」

「五十二歳、ごく普通の家庭人です。テロリストに狙われるような経歴の人じゃありません」

スーザンが無線機に聞き耳を立てている。

「総理執務室は異常なし。五階を調べてる。彼らが来る前に安全な場所に移る必要がある。でもそんなところ、どこにあるの」

「彼らが五階を調べ終わって、四階に降りてくる前に、上にのぼりましょう。そして、彼らがここを調べ終わったら、また戻ってくる。

私が誘導します」

明日香は短機関銃を持って立ち上がった。

ドナルド大統領は、スマホを耳に当てたまま凍り付いていた。壁際の大型テレビはバスケットボールの試合を中継している。

「おまえは、誰だ」

大統領はリモコンでテレビの音を消してから呼びかけたが、返事はない。

この電話番号を知っているのは、限られた者しかない。正確に言うとな九名だ。彼らとは全員、二十年以上の知り合いだ。一緒に仕事をした者もいるし、している者もいる。

そのスマホにかかってきた電話が沈黙しているので、ただ事ではないと思いはじめたのだ。

「私は暇な人間じゃない。秒単位で仕事をしている。あんたも、アメリカ合衆国大統領がどれほど忙しいか、知ってると思うが」

〈では、もっと忙しくしてやろう〉

やっとな声が返ってきた。だがその声は、ボイスチェンジャーを使って変えてある。

〈東京で総理官邸が占拠されたことは知っているな。その中にはアンダーソン国務長官と駐日アメリカ大使夫妻も入っている。それから、もっとも重要な一人が、スーザン・ハザウェイだ〉

「誰だ、その女は。そんな名前に記憶はない」

言いながら、心に引つかかるものがある。

「回りくどい言い方はやめる。ハッキリ言うんだ」

へいま言っても、信じないだろう。先に、これから言うものを用意してくれ」

「待ってくれ、メモを用意する」

大統領は秘書を呼んで、電話の発信元を特定するよう指示しようかと思っただが、止めにした。どうせ相手も手を打っているだろうから、簡単には突き止められないだろう。それより電話の主が言う、官邸に人質になっている、もっとも重要な一人、スーザン・ハザウエイという女が気にかかった。

電話の男は、要求を始めた。

へまず二億ドルを指定の銀行に振り込むこと。それに、アラスカで開発中のシェールオイルとガス田の開発中止。さらにジェームズ・レポートの公表だ。あんたらが闇に葬ったが、当然まだ持つてるだろ。この要求を公表する、しないはあんたの自由だ。私たちは目的さえ達成すればそれでいい」

「そんな馬鹿げた要求は——」

〈後でまた連絡する〉

ドナルト大統領が言いかけたところで電話は切られた。ほんの数分の出来事だった。

大統領はスマホをデスクに置くと、二つの要求について考えた。一つは問題ない。どうせ自分の金ではない。国家安全保障の機密費

の中で秘密裏に動かせるギリギリの金だ。

問題は二番目だ。これは自分一人の判断では決められない。損失はあまりに大きい。呑める要求ではない。対テロ部隊を送り込んで解決すべきだ。

しかしそもそも、この電話は何だ。電話番号を知っている奴の冗談か。それとも――。もうしばらく様子を見よう。

そう決心したとき、大統領の心の奥に黒い点が現れた。それは瞬時に膨れ上がり、重苦しい闇のボールとなり、全身を包み込んでいく。動悸どうきが速くなる。

ドアをノックする音が聞こえる。

時計を見ると約束の時間だ。側近を呼んで、日本の総理官邸の人間事件について話し合うことになっている。

「入ってくれ」

立ち上がり、なんとか平静を保って言った。

ドナルド大統領はすでに三十分も室内を歩き回っていた。

トーマス・ロビン大統領首席補佐官とブーン・コナー国務副長官は椅子に座って、大統領の動きに合わせて視線を動かしている。

大統領が立ち止まった。二人の視線も大統領に向けて止まっている。

「この二つの要求は日本サイドは承知しているのか」

「おそらくテロリストが接触しているのは、ホワイトハウスだけだ

と思われず。日本の外務省からは、官邸の通信手段が完全に絶たれていると報告があったままです。要求があったとすれば、日本政府には別の内容でしょう」

「総理官邸を占拠したら、たまたま日米の要人がいた。だから、二国に要求を突きつけるというのか」

「それはまだ分かりません。日本に問い合わせても回答が得られるとは限りませんが」

「テロリストが、日本に要求するとすれば何がある。官邸を占拠するという大事件を冒してまで」

「日本に要求するとしたら——金でしょう。その他に政治的な要求は……」

首席補佐官は考え込んでいる。そもそも、首席補佐官は日本の政治的な立場など詳しくは知らない。大統領はさらに知らないだろう。早急に調べさせる必要がある。

ドナルド大統領が口を開いた。

「ホワイトハウスとしては金も、レポートも、どちらの要求も呑めない。アラスカのシェールオイルとガス開発即刻中止など、何百億ドルもの損失につながる。いや、将来的にはそれ以上だ。ハドソンCEOが受け入れないだろう。彼には選挙運動で世話になった。五百万ドルの支援は大きかった。より細かなキャンペーンを行うことができた。再来年の再選時も世話になるだろう」

「二億ドルなど、論外です。何を根拠にこんな申し出をしてきたの

でしょう。アンダーソン国務長官と日本の新崎総理の命ですか」

「日本側に問い合わせしてほしい。要求は来ていないか」

「事件の詳細の説明を求めていますますが、要領を得ません。総理不在でかなり混乱しています」

「と、いうことは既に要求はあったとみるべきだ。政治的駆け引きのできない国民性だ。なるべく早く、その内容を調べてほしい」

「彼らもこっちの対応を探っているのかもしれませんが」

大統領はため息をついた。二年前に政界に入ったとき、ここはまるで動物園で、狐と狸の腹の探り合い、足の引っ張り合いだと言ったことがあるが、まさにその通りだ。

話題を変えるために聞いた。

「スマホの発信元は判明したか」

「探してはいますが、かなり難しいとのこと。追跡を防ぐプロが関係していると言っています。複数の国を経由したうえに、衛星電話を使った通信です」

聞いてはいたが、半分も理解できていない。大切なのはデジタル情報がどういう道筋で、自分のスマホに入ってきたか、ということではなく、誰が、どこからかけてきたかということだ。それについては、全く分かってはいない。

「テロリストが要求事項を大統領個人のスマホに掛けてきたというのは、いささか驚きました。同時に問題も多い」

首席補佐官は直接的な言い方は避けているが、身内のいたずらか

冗談ではないかとほのめかしているのだ。

「さらに、たかが国務長官の拉致らちでこれだけの要求が通ると本気で考えているのでしょうか。我が国の鉄則はテロリストとは交渉しないということです」

「日本は別だと考えているのではないですか。かつての例もある」

「日本の総理と閣僚、我が国の国務長官と駐日大使夫妻が人質だ。このうち、だれがテロリストの真の目的か」

「大統領個人のスマホの番号を知っているのは」

国務副長官が聞いた。この男は最近、アンダーソン国務長官とうまくいっていないという噂がある。

「ごく親しい友人だけだ。彼らだとは思えん。どこかの悪党が、何らかの方法で番号を手に入れて、使っているんじゃないか」

「スマホの番号を知っている方たちを調べて構いませんか」

「当然だ。秘書にリストを届けさせる。ただし、極秘でやってくれ」
「疑問に思っていることがあります」

首席補佐官が大統領を見た。

「何でも言ってくれ。信頼できるのは、おまえたちだけだ」

「大統領は、なぜ、その電話がテロリストのものだと信じるのです。事件が起こっているのは海の向こうです」

首席補佐官はいつになく真剣な表情で大統領を見ている。

大統領は答えない。

「大統領はこの電話が、いたずらではなくテロリストからのもので

あることを認めていらっしやるようだ。その根拠は何なのです」

首席補佐官がドナルド大統領を見すえて、再び聞いた。

大統領は椅子から立ち上がって、室内を歩き始めた。落ち着きのない歩き方が大統領の動揺を表している。

やがて立ち止まって、二人の方を見た。

テーブルの上のペーパーを取った。人質となったアメリカ国民、

十八人のリストだ。政府関係者とマスコミの者たちだ。

「スーザン・ハザウェイ、この女について調べてくれ」

「そのワシントン・ポストの記者がどうかしましたか」

「いちばん若い。しかも女性だ。家族も心配しているだろう」

大統領は平静を意識して慎重に言った。

3

警視庁に設置された対策本部は喧騒けんそうに満ちていた。

総理官邸への地下道での爆発は、警察に関係するすべての者たちに混乱と衝撃を与えていた。

日本国内でテロの犠牲者が一度で二十人を超えるのは初めてだ。

死亡したのは全員、警察官だ。さらに数時間前には警護官が死亡しているとなると、国民に与える衝撃は計り知れない。

「静かにしてください」

梶元の声でざわめきは引いていった。

「今は、殉職者の冥福を祈るばかりです」

「S A Tが全滅した件は、報道関係にはしばらく伏せておいた方が得策かと思います」

秘書の長森が梶元の耳元で囁いた。

地下道に入ったS A T二十三名のうち、死亡が確認されたもの十五名、負傷者五名、行方不明者三名と報告があった。三名はおそらくまだ埋まったままなのだろう。

「いずれ、公表しなければなりません。事の重大性を知らせるためにも、早急に発表してください。犠牲者の氏名については間違いのないように。負傷者については収容病院について家族に知らせてください」

室内にざわめきが広がった。何人かは受話器をとり、別の者は準備のたぐいに対策本部を出て行った。

そのとき、ドアが開いた。

入ってきたのは高田警視總監だ。

「副総理、総監室においでください」

「今でなければならぬのかね」

「至急です」

有無を言わせぬ声と表情だった。

梶元とともに歩き始めた長森に高田が眉をひそめたが、何も言わなかった。

警視総監室のソファーには、警察庁長官が座っている。

梶元が座ると同時に、テーブルにあった紙を梶元に向けた。

「テロリストからの要求です。たった今、届きました」

「本当に、テロリストからのものですか」

「官邸の総理執務室のファックスから、警視総監室のファックスに
です」

「日本語ですね」

「前もって用意していたものでしょう。テロリストに日本人が含ま
れているという情報は今のところありません」

じつと見つめているだけの梶元の代わりに、長森が用紙を持って
読み上げた。

「一つ。今後五年間に十万人規模の難民を受け入れることを国際社
会に表明すること」

「日本も難民は受け入れている。今さらなぜ要求する」

「テロリストはそうは思っていないでしょう。去年の受け入れ実
績は五十人に足りません。この要求は呑むしかありません。もう

一つは、なんですか」

「一つ。指定する銀行に一億ドルを振り込むこと。これらについて、
夜明け後に再度連絡する」

時計を見ると、夜明けまでにまだ三時間以上ある。

「一億ドルだと。日本円で約百十三億円。バカなことを言うな。そ
んな額をテロリストに支払うわけにはいかない。また、国際社会か
ら浮き上がって、非難されるだけだ」

「日本のトップが囚われているんだ。ただの人質とは違う」

警視總監と警察庁長官が吐き捨てるように言う。

「日本国総理大臣の身代金が一億ドルですか。これを高いとみるか、安いとみるか。いずれにしても、内閣官房機密費から払うことになるでしょう。それだけあればの話ですが」

梶元の言葉で二人は黙った。

「この身代金は新崎総理、アンダーソン国務長官、さらに他の大臣や大使以下、招待客、官邸職員全員のものでしょうか」

「当然です。総理だけが救出されても意味がありません。かえって、国民や他国の反発を買いいます」

「テロリストとの取り引きはしないというのが国際ルールじゃないのか。金額にかかわらず、振り込んだ金は次のテロの資金になる」

「難民受け入れの要求は、国際的には支持を得るだろう。国内的には真つ二つに分かれるが」

警視總監と警察庁長官が言い合っている。

梶元は二人に向き直った。

「テロリストはそれを狙っているのかもしれませんが。むげに跳ね付けると、国際的非難を浴びます」

「金の要求は拒否するべきです。金額は問題ではありません」

「いや、秘密裏に金額を含めた交渉を行うべきだ」

「彼らと話はできますか。電話が通じているのなら」

「ファックス終了と同時に試みましたが、すでに回線は切られてい

ました。彼らは自分たちが話したい時だけ、回線をつなぐつもりでしよう」

「今度、連絡があつたときは、私が話します。その旨を何とかして、相手に伝えてください」

梶元はもう一度、ファックス用紙を手にとって目を通した。

「山根やまね法務大臣を呼んでください」

梶元は長森に告げた。

山根法務大臣が神妙な顔でファックス用紙から顔を上げた。

「五年で十万人の難民の受け入れは無理です。年にして二万人。大混乱が起こります。第一、今も日本は難民を受け入れていません」

日本への難民申請は増え続け、年一万人を超えている。しかし、実際に難民と認定されるのは五十人に満たない。

そのため、日本は国連難民条約を批准ひじゅんしているにもかかわらず、「本当に難民を受け入れようと思つて審査しているのか」という批判が内外から出ている。EUでは、半年だけで三十万人近くを難民として認定している。またアメリカも、シリア出身者などのイスラム教徒を含む八万人以上の難民を受け入れてきた。

難民申請中は強制送還されず、短期滞在などのビザがあれば申請の半年後から日本で働くことができる。だから申請の数が増え続けるという見方もある。

「まずは、世界に向けて公表しろということでしょう。こういう内

「容は、一度世界に向けて発信すると取り下げるわけにはいきません」
「言葉だけなら、いつでも取り消すことができます。状況が状況ですから」

「テロリストに脅されて発表したことなので、なかったことにしてくれとは許されなんでしょう。難民問題に関しては世界が頭を悩ませていることです。日本には、今までも風当たりは強かった。日本は世界に対して十分な役割を果たしていないと」

「しかし、国内の反対勢力が黙ってはいないでしょう。未だに日本は単一民族国家と信じ、それを堅持しようとしている者も多くいます。十万人規模といいますと、イスラム過激派の流入も考えられます。そうなれば——」

「時間の引き延ばしをしましょう。その間に、何とか次の手を考える。無事に人質を解放する手段です」

秘書の長森が山根法務大臣の言葉を遮った。

大臣がジロリと見たが、長森は気にとめる様子もない。

梶元はかすかに息を吐いたが、無口だった。

「今、テロリストたちは五階を調べてる。四階に降りてくるのは時間の問題」

無線を聞いていたスーザンが言う。

「早くエレベーターまで行きましょ」

明日香は立ち上がり高見沢に手を出した。

高見沢は顔を上げて明日香を見たが、何も言わずその手につかまり身体を起こした。モルヒネが効いているせいか、わずかに顔をしかめただけで立ち上がった。

「血痕けっこんなど痕跡を残すな」

「分かってます。最初の訓練で習いました」

「訓練と——」

「実戦は違いましたね。それは高見沢さんから毎日聞いています」

三人は四階の部屋を後にした。監視カメラの位置は頭に入っている。可能な限り死角を通る。エレベーターに向かって歩き始めたとき、無線機を耳に当てていたスーザンが声を出した。

「待つて。彼らはエレベーターを使っている。階段に急いで」

廊下の突き当たりに行き、階段に待機した。

「彼らが四階に移動を始めると、直ちに五階に移るのよ」

「五階にテロリストが残ってたら、どうするのよ」

「私が始末する。音をたてずに」

明日香が腰のナイフに手をかけて言う。

スーザンが頷いて無線機を耳に当てた。ボリュームを上げているので声が漏れてくる。

〈五階、クリア。プリンセスはここから下だ〉

〈完璧に調べるんだぞ。見落としは許さん〉

無線機からは緊迫したやり取りが聞こえる。

プリンセスとはいったい誰だ。明日香の疑問がさらに膨れ上がる。

重要人物であることは想像がつく。王女というからには女性なのか。いや、決めつけは禁物だ。

〈これから四階に向かいます。全員、エレベーターに乗れ〉

「今よ。彼らはエレベーターに乗った」

スーザンの言葉で三人は階段を上がり始めた。

二人で高見沢を両側から支えて階段を登った。

五階に上がり、ドアを数センチ開けて覗いたが、廊下に人影はない。

「テロリストたちはすでに四階に降りている。誰もいないはず」
「待って、私が見てくる」

明日香はやはり監視カメラの死角を頭に描いて、廊下に出た。電気はついているが、静まり返っている。

エレベーターの階数表示が五階で点滅を始めた。明日香は慌てて総理執務室に入った。

廊下に足音が響き始めた。足音は総理執務室に近づいてくる。人数は——一人だ。

ナイフを抜いて握りしめた。自分から出ていくべきか、その場合、言葉はどうする。自分の英語では簡単に正体がばれる。明日香は迷った。だが、何をしに戻ってきた。

足音は総理執務室を通りすぎ、隣の部屋に入っていく。

すぐに出てくると足音が遠ざかっていく。ドアのすき間から覗くと、手にウイスキーとワインの瓶を持っている。それを取りに戻つ

てきたとは、やはり彼らは寄せ集めのテロ集団だ。

エレベーターが閉まるのを確認して、高見沢とスーザンを連れて、総理執務室に入った。

警視総監室では梶元と法務大臣以下、警察関係者が向き合っていた。

「金は内閣官房機密費から出せば問題ありません。問題は難民に関することです。国際社会はテロリストに賛同するでしょうね。一度公おおよけにすれば引っ込めることはできません。金については公にはできません。テロリストと極秘の交渉が必要です。公になれば、世界から非難を浴びます。日本は自動車ばかりでなく、テロも輸出している」と

警察庁長官が言う。

「やはり、ムリな話です」

梶元が細い声を出した。

「今後五年間で十万人の難民受け入れ、とりあえず年間二万人。そんな決定を、私の一存でできるわけがない」

梶元の声は上ずっている。警視総監が時計を見て言った。

「あと二時間あまりで夜明けです。国会を開いて議論をしてからな
ど、ムリな話です」

「とりあえず時間ぎりぎりまで待って、了解の返事をしましょう。
詳細はそれから考えればいい」

長森が梶元をなだめるように言う。

「アメリカはどうなっている。ドナルド大統領には、要求はいって
いないのか」

法務大臣が苛立った口調で言った。

「アメリカからは何の連絡もありません。日本に来た要求を伝えま
すか」

「時期尚早でしょう。相手が何者かも分かっていません。もう少し
様子を見てからの方がいいでしょう」

梶元の代わりに長森が間髪かんはつを入れず答える。

「アメリカの国務長官が総理と共に人質になっています。テロリス
トの要求を伝えないわけにはいきません」

「要求には断固拒否するように言ってくるでしょう。しかし、一国
の総理と国務長官とは扱いが違います。口出しされるよりは、黙っ
ている方が——」

ノックの音が聞こえる。どうぞ、と言いかけた言葉を梶元は飲み
込んだ。ここは警視総監室だ。

警視総監の声で入ってきたのは外務副大臣だ。

「ここにおられると聞いたもので」

副大臣は居合わせた者たちに視線を走らせた後、梶元に目を止め
た。

「いいから話さない。何かあったのでしょうか」

梶元がうながすように言った。

「アメリカのリース副大使が、副総理に面会を求めてきています」

「すぐに会います」

梶元は高山警視總監を見た。

「私の応接室にお通ししろ。ただし、私も同席させていただきませう」

梶元はかすかに頷くと、案内するように言った。

「アメリカのネイビーシールズ部隊三十名が到着しました。現在、厚木基地に待機しています。官邸正面の現場近く、できれば現場の対策本部に移動させたいのですが」

リース副大使は流暢な日本語で言った。

副総理、副大使の関係ということで何度か会ったことがある。

ネイビーシールズは、アメリカ海軍特殊戦コマンドの管轄下にある特殊部隊だ。沿岸部の偵察や攻撃阻止、敵地での特殊作戦や情報活動、心理作戦、非正規戦などの活動を行っている。アフガニスタンやソマリアなど、内陸部での活動にも投入されている。ウサマ・ビン・ラディンの殺害作戦を遂行して、世界に名を知られるようになった。

現在、北朝鮮がらみの朝鮮半島危機に対応して、韓国にも駐留している。その部隊が急きよ派遣されてきたのだ。

「武装した外国軍隊が基地外に出るとなると、問題が大きくなります。我が国にも対応できる部隊はありません」

梶元より先に長森が答えた。

「警視庁のSATチームが突入を試みたと聞いています。全滅だとか。お気の毒なことです。我々のシールズは十分な訓練を受け、実

績もあります。アメリカ合衆国はなんとしても、アンダーソン国務長官とベイカー大使夫妻、それに、現在囚われているアメリカ市民を無事救出したい。それがネイビーシールズの使命です」

「しばらく待つてもらえませんか。まだテロリストの正体さえ分かっていません。テロリストもそろそろ動き出すでしょう。我々はこの以上の犠牲者は一人も望んでいません。可能な限り、話し合いで解決したい」

梶元が穏やかな口調で言う。

「すでに戦闘が始まっています。犠牲者も多数出ています。警護官が死亡したとも聞いています。我々は、犠牲者を最小限に食い止めることができます」

「テロリストたちを射殺するということですか」

「大統領は最善と思うやり方でやるようにと。それに応える用意があります」

副大使が自信を持って言い切った。

ネイビーシールズは現場近く、自衛隊の特殊部隊と共に待機することに決まり、副大使は帰っていった。

三人は警視総監室に戻った。

「テロはわが国で起こっています。なんとしても、自国の力で解決すべきです。他国の力を借りるようなことがあれば、物笑いの種です」

警視総監が言うと、警察庁長官が首を横に振っている。

「しかし、当面できることはないでしょう。それであれば——」

「近くの高層ビルで官邸の敷地内が見える部屋に新たなS A Tを配置する予定です」

「狙撃するつもりですか」

警視総監の言葉に警察庁長官が驚きの声を上げた。

「官邸周辺に高層ビルを建てるときには、官邸内部が直視できないように設計してもらっています。警備上の理由です。現在は、少し手を加えれば官邸内が見える部屋を探しています」

「できる手はすべて打っておいてください」

そう言って、梶元は時計を見た。あと一時間ほどでテロリストから連絡があるはずだ。

梶元は立ち上がり、窓際に行った。薄暗い東京の夜が広がっている。

数時間前に見た、ライトアップされた官邸を思い浮かべた。

昨日の夜から十時間あまりの間に何人の人が死んだのだ。突入したS A T、官邸内部では警護官が撃たれたという報告もある。これ以上の犠牲者は避けなければならない。この事態を解決するには、自分ではあまりに非力すぎる。

梶元は必死で考えていた。時間だけが過ぎていく。

「要求は全て呑みましよう。私の責任で、です。早くこの事態を解決しなければ。これ以上、犠牲者が出ることには耐えられません」

振り返って、室内にいる者に向かって言った。

4

やがて夜が明け始めた。

総理官邸が朝日の中に浮かび上がる。いつもと変わらない風景だが、あのシンプルで品のいい建物の中では世界の現実を濃縮したような惨劇が起こっているのだ。

現場の責任者、警護課長の横田は指揮車の前に立って官邸を見ていた。この五百メートル以内に数百名の警官と自衛隊が息を呑んで待機している。

「危険です。後退してください」

部下が指揮車から出てきて声をかけた。

「テロリストからは何も言ってこないのか。官邸が占拠されてからすでに、十時間がたっている。人質を取って立て籠もるなら、何かの要求があるはずだ。それとも、すでに要求はあったが、どこかが隠しているのか。その可能性が強そうだ」

横田は無意識のうちに口に出していた。

部下が突然何を言い出すのだ、という顔で横田を見ている。

「すぐ指揮車に戻る。先に行ってくれ」

そのとき、ヘリのローター音が聞こえ始めた。見上げると明るみ始めた南東の空に黒い点が見える。その点はみるみる大きさを増し

て、へりの形となって近づいてくる。

路上に座り込んでいた警官たちも、立ち上がって空を見上げている。

「どこのへりだ。すぐに調べさせる。引き返すように伝えるんだ」

横田は隣で見上げている部下に怒鳴った。

(つづく)